《授業と子ども》

ひらがなの授業(10)

―ねじれた長い音は三つの文字でかく―

千葉　建夫

ねじれた長い音

前回の「ねじれた音」（拗音）の授業を終えて、子どもたちが直音と拗音の音の違いが分かり、「ねじれた音」をひらがな二文字で書き表すことを、ひととおり分かるようになったら、次はいよいよ「ひらがな学習」の最後の段階である「ねじれた長い音」（拗長音）の学習に入る。

子どもたちの何気ない会話を聞いていると、「図書館」を「としょうかん」といったり、「女王」を「じょうおう」といったりしていることを耳にする。単語の中から拗音と拗長音のちがいを聞き分けたり、発音したりすることは子どもたちにとってそうやさしいことではないようだ。

意味の区別に影響がないときには厳密に発音しなくても意味が通じることもあるが、子どもたちが作文を書けるようになると、文字の表記から、子どもたちの発音のあいまいさに気がつくことになる。拗音と拗長音の文字の表記の前にこの二つの音の違いをしっかり意識させておきたい。

拗長音は、拗音を最後の母音までもう一拍のばすもので、一音節に要する拍数は二拍になる。これまで学習してきた拗音と長音を組み合わせたものとして考えられる。

授業では、まず、拗音と拗長音の入った単語で、一音節がちがうと、意味が確実にちがってくる単語をとりあげて、その聞き取りと発音を十分に練習してから、文字の学習に入るようにした。

「にんぎょ」と「にんぎょう」のちがいは

おもちゃ箱をかかえて教室にはいった。箱の中から子どもたちから借りておいた人形を出して、机の上にならべた。キューピーさん、日本人形、リカちゃん人形。ひな人形、五月人形、からくり人形、いろんな人形がならんだ。

「あっ、オニンギョさんだ。かわいい―」

手にとって、ほおずりをしている子もいる。子どもたちとしばらく人形を手にとって遊んだあとで、一つの人形をとりだして、「これは、なんといいますか？」と聞いた。

図①

●●？

「ニンギョ」と「ニンギョウ」という声が混じったまま、聞こえてきた。

「いくつの音ですか？」

「みっつのおとです」

「書いてみるよ」

そういって、一枚の人形の絵を黒板にはって、そのわきに「・・？」と記号をつけた。（図①）

「この三つ目の音は何の音ですか？」

「ねじれた音！」

元気のいいコウタ君の声がした。今まで拗音の学習をしていたものだから、自信たっぷりな発言だ。その声に多くの子どもたちが賛成した。

そのなかに不思議そうに考えている子どもがいた。

「そうかな。ぼくね。ニンギョウだと、おもうんだけど」

ちょっとたよりなげだが、意見をよくいうジュン君だ。

「ジュンくんはね。これ、『ニンギョなくて、ニンギョウじゃないの』といっているよ。みんな、どうなの？」

と、その発言を子どもたちに返した。

「えっ、ニンギョじゃなくてニンギョウなの―」

子どもたちの中に動揺がおきた。すると、ノリコちゃんが

「あのね。わたし、ニンギョひめのお話よんだの。ニンギョは、うみのなかにいるんだよ」

ノリこちゃんが、アンデルセンの「人魚姫」のお話をしてくれた。人形がニンギョでないと気がついてきた子も出てきたようだ。

次に人魚の絵をとりだした。

「これは、何でしょうね？」（図②）

「ノリちゃんが話してくれたニンギョだ」

図②

「こちらは（図①）？」「ニンギョウ」

「こっちは（図②）？」「ニンギョ」

「せんせい、三つ目の音がちがうよ」

「そうなんです。『ニンギョ』と『ニンギョウ』では、どちらも三つの音の単語ですが。おしまいの三つ目の音がちがいますね。音がちがうと、意味がちがってきますね」

二つの発音の違いを意識させて、もう一度発音させた。

『ニンギョ』の三つ目の音は、何の音です？」

「ねじれた音」「いい」

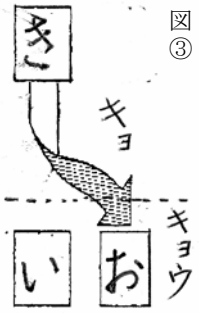
「そうですね。では、こちらの『ニ・ン・ギョウ』のほうも、同じ音ですか？」

子どもたちは「ニンギョ」と「ニンギョウ」としきりに発音していたが。やがてわかったようだ。

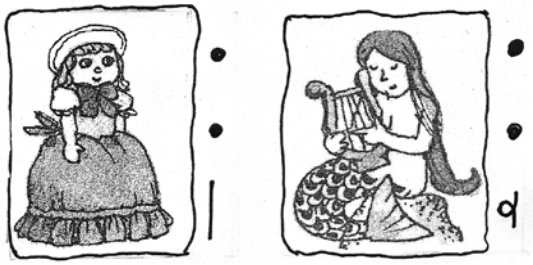
「あのね。ちがう音。『ギョ』は、ねじれても、おかあさんところまでいかないでしょ。でも、『ギョウ』は、おかあさん音のところまでいくでしょう。長い音なんじゃない」

「そうだ、わかった！これはねじれた、長い音なんだ」

まわりの子どもたちも「そうそう」といいながらうなづいている。発音を意識的に学習してきた子どもたちは、ずいぶん音の作りに敏感になってきたものだ。（図③）



図③



図④

「よく、気がついたね。すごいよ。実は、『ねじれた音』にも『みじかい音』と『ながい音』があるのですね」

そういって、「ニンギョ」には、「・・ㅓ」、「ニンギョウ」には「・・—」を書き入れ、この「ギョウ」という、ねじれた長い音の発音は、2拍分の音の長さになることを確かめた。（図④）

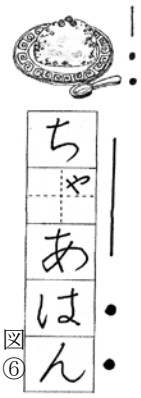
このあとは、拗音と拗長音の一音ちがいでまったくちがう意味になる単語をいくつかとりあげ、単語の意味を説明し、対比しながら、発音の大事さを学んだ。（図⑤）

図⑤

あだん、うだんのねじれた長い音はどう書くの？

拗長音は**拗音が一拍伸びた音**、つまり、**ねじれたまま、おかあさんの音まで届いた音**という基本的な法則がわかると、あとは理解が早かった。

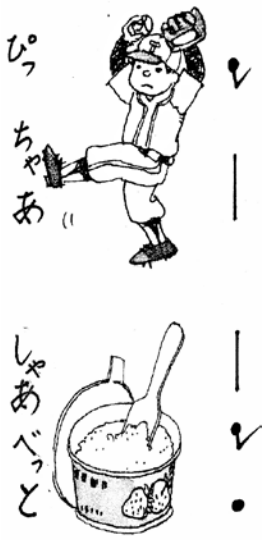
これまで、まっすぐな音（直音）の長い音（長音）は、「ああ、かあ、さあ、」のように最初の文字に、おかあさんの音（母音）の文字をそえて、ひらがな二文字で書き表していた。これを応用すると、ア段のねじれたながい音は、どんな書き方になるか、子どもたちにもおよそ推測ができるだろう。



図⑥

「ちゃわん」と「ちゃあはん」を例にとりあげた。（図⑥）

ア段のねじれたながい音は、イ段の文字に小さな[や]をつけ、その後に母音の文字[あ]をつけ



図⑦

ればいいとわかった。そして、ねじれた長い音は一つの音だけれど、ひらがなの三つの文字を使うことを説明した。ア段の拗長音の入った単語は外来語が多いので、練習にふさわしい単語ではないのだが、「ぴっちゃあ」や「しゃあべっと」などをとりあげ、ひらがなの表記の約束にそって書いてみた。（図⑦）

にゃあ　にゃあ

おぎゃあ　おぎゃあ

じゃあ　じゃあ

図⑧

また、ものの名前だけでなく、なき声、ものの音なども取り上げて練習をした。（図⑧）

続いて　ウ段のねじれた長い音にはいった。

ウ段は、ア段のねじれた長い音で学んだ法則をそのまま応用できる。子どもたちは、ウ段のねじれた長い音は、イ段の文字に小さい ゅ をつけ、その下におかあさんの音の文字 う をつければいいとすぐ理解できた。ここでは、「きゅうり」「ぎゅうにゅう」「ちゅうしゃき」などの単語をとりあげ、ウ段のねじれた長い音の発音と表記の練習をしておいた。（図⑨）

きゅうり・

ちゅうしゃき・

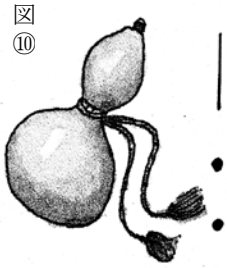
ぎゅうにゅう

きゅうきゅうしゃ

図⑨

おだんのねじれたながい音、お手つだいは　だれ？

五月の家庭訪問のとき、ある子の家をたずねたら、床の間にひょうたんが飾ってあった。その家のおじいちゃんが畑仕事にでかけるときにこれに水（お酒？）を入れて持ち運ぶのだという、オ段のねじれた長い音を学習したときは、その大事なひょうたんを借りて、教室にいった。（図⑩）



図⑩

目ざとく見つけたタッちゃんが、「それ何？、せんせい」と反応してきた。ひょうたんを高々とかかげて、「さあ、何だと思う？」と聞き返した。

「きゅうりじゃないな。うりでもないよな」

「なに。それ、教えてよ」

「ぼく知ってる。てんぐが、おさけをいれてのむやつだよ。それ、『ひょうたん』でしょう」

日本昔話の大好きなヒロノリ君があててくれた。

「そうです。これは、ヒョウタンといいます」

おじいちゃんの「ひょうたん」のおかげで、授業がスムーズに展開していく。

「いくつの音ですか？」
「三つのおとです」
「ねじれて長い音がありますね。何番目の音ですか？」
「さいしょの音です」
「では、その音に気をつけ、『ヒョウタン』とひらがなでかいてみましょう」
白いカードを渡して、一人一人書いてもらい、そのカードを集めて、分類してみた。（図⑪）

①と②は発音すると、まちがいだとすぐわかった。子どもたちの表記は③の「ひょおたん」が圧倒的に多かった。

図⑪
① ひおたん
② ひょたん
③ ひょおたん
④ ひょうたん

発音どおりにすなおに書きたい気持ち持ちがよくわかる。けれど、日本語の表記はそうなっていないのがつらい。④の「ひょうたん」と書いた子も何人かいた。教室にはひらがな五十音図とオ段の長音表記の図表をはっておいたのだが、しばらく前に学習した長音の「オ段の表記」を思いおこしてくれていたのだろうか。授業は「③ひょおたん」と「④ひょうたん」の二つをとりあげ話し合った。「③ひょおたん」は発音どおり書いたと理由ははっきりしている。④ひょうたん」と書いたアサミちゃんが

図⑫

きょうだい
しょうねん
ちょうちん
にょう
ひょうたん
みょうが
りょうかん

「あのね。『お』のおかあさんはおでかけで、オ段の子どもが長い音になりたいときに、『う』のおかあさんがお手伝いにきてくれたから」（図⑫）
とそのわけを話してくれた。これを聞いて、「③ひょおたん」と書いたヒロノリ君が
「そうか。ねじれた長い音のときも、『う』のおかあさんがお手伝いにきてくれるのか」
と、感心したように言った。すると、
「だったら、ねじれた長い音には『あまえんぼうのたんご』はいないのかな」
とワタル君が心配そうに聞いてきた。
「ねじれた長いおと」の単語には「あまえんぼうの単語はいませんでした。だから、ぜんぶ『う』のおかあさんでい

図⑬

いのですよ」と説明してやると安心した顔になった。こうして、「ヒョウタン」の「ヒョウ」は、「ひょう」とひらがな文字三つで書くことをみんなで確かめあうことができた。オ段のねじれた長い音では、「ぎょうじ」、「びょういん」などの単語をとりあげ、発音と表記の練習をした。（図⑬）

いろいろな音は　学んだことの組み合わせで

学習の最後は、拗音や拗長音の単語が入った短い文章を音読したり、その単語をとりだし、正確に表記したりする練習をくりかえし行なった。

これでひらがなの基本的な内容の学習が、すべてが終わった。教科書の文章もほぼ大丈夫だが、日本語の単語のなかに、少し応用が必要になってくるものがある。その単語もこれまで学んだ音と表記の原則を組み合わせて考えれば十分にわかることだ。

お祭りの縁日でよくうられている「おかめ」と「ひょっとこ」のお面がある。「ひょっとこ」のお面を見せて

「いくつの音？」「三つかな？」

「そう、三つの音ですね。その最初の音はなんの音？」

「『ヒョ』でも、ない、『ヒョウ』でも、ない。『ヒョッ』、『ヒョッ』だから、・・・・・・・・・」

図⑭

「最初はねじれて、あとで　つまってる・・・・・・」

「これ、ねじれた、つまる音かなあ？」

「そう、すごい。よくわかったね。『ヒョットコ』の『ヒョッ』は、ねじれたつまる音といってもいいでしょう。ひらがなでは、どう書いたらいいと思う？」

「にじれた音は『ひょ』、そしてつまる音だから『ひょっ』」

「そのとおりだよ。だから、『ヒョットコ』は『ひょっとこ』となりますね。」（図⑭）

このようにして子どもたちは、「りゅっくさっく」（図⑮）「にょっきり」「ひょっとしたら、」「はさみで、ちょっきん」、などのような「ねじれたつまる音」も考えることができた。また、「しゅうっと、まがる」「きゅうっと、いっぱい」、のような「ねじれた長いつまる音」といった単語も、音の作りから判断できるようになっていった。

図⑮

これで、もう十分に日本語の発音とひらがな表記の原則を学んだことになる。このあと、子どもたちは、読み書きを十分に積み重ねる中で、日本語のしくみやきまりをより確かなものとして身につけていくことができるだろう。

次回からは、ひらがなの学習を土台にしたカタカタ学習にふれておきたい。